

余
滴

素戔鳴神社の春

東京都荒川区と足立区とを結ぶ隅田川千住大橋の南詰め、日光街道の基点とされる場所に、一つの神社がある。『古事記』の暴れん坊、須佐之男命を主神とする素戔鳴神社である。

ここでは、邪気を祓う桃を神霊とする疫神祭にちなみ、時節になると、参集殿や神楽殿に雛人形が飾られる。いずれも氏子から奉納されたもので、約二〇〇〇体にも及ぶ。色とりどりの桃の花を御供えとして、七段飾りに並べられた人形群は壮観といえる。

三月のある日、私はこの参集殿を訪れた。数多くの雛の中で、とりわけ最上段の女雛に目が留まった。あどけなさを残したふくよかな顔で、豪華な冠を頭に乘せていた。その冠から垂れた「かざし」が、折から本殿の方より流れてきた雅楽の「越天楽」に呼応するかのように小刻みに揺れ、金色の光を放っていた。

越天楽 女雛の挿頭かざし艶めけり

素戔鳴神社の春

河原晴樹

参集殿から外へ出ると、石畳の右手に松尾芭蕉の石碑があった。ここ千住は、「千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく」と芭蕉が『おくのほそ道』に書き残した矢立初めの地であり、石碑には、この詞とともに、「行くはるや鳥啼き魚の目は泪」の一句も、刻み込まれている。側には、芭蕉の座像もすえられている。これらは、一八二〇（文政三）年一〇月一二日の芭蕉忌に際し、江戸の儒学者亀田鵬斎が銘文を、建部巢光が座像を手がけるなど、千住宿に集う文人達により建てられた。長年の間に傷んだ句碑を、主神の御鎮座一二〇〇年祭に当たる一九九五年に、新しく復刻したものである。

句碑の前には、隅田川と千住大橋をかたどった細長い池も造られている。竜の口から勢いよく吐き出される水がつくる池のほとりには、みずみずしい花卉をつけた菜の花が、茎を伸ばして凛と立っていた。

竜の吐く水にゆるがず花菜かな

この神社の境内には、桃の木とともに、銀杏の木も多い。水場のすぐ近く、本殿の東側にも、銀杏の大樹がある。母乳の出不い婦人がこの樹皮を煎じて飲み、この樹に絵馬を掛けて、幼児の無事成長を祈ったという言い伝えから、「子育て銀杏」と呼ばれている老樹である。

私が目を移したとき、この銀杏のかたわらには、晴れ着を身につけた幼女を抱いた老人がいた。恐らく、祖父と孫であろう。

二人は、天を突き刺すような大樹の枝先を見上げ、指さしながら、何かを話し合っている。よく見ると、一見裸木に見えた銀杏の梢には、芽と思われる小さなふくらみがあり、そこをかな風が吹き過ぎている。

青空に向かう、その木の芽吹きには、幼女の未来を思わせられた。

大きな目と見上げる木の芽風